専修人文論集 109号
（2021）397-415

医学書における「ような」表現の特徴

三　枝　令　子*

1．はじめに

筆者はここ数年，外国人医学生の日本語支援を目的として，医学書の分析をしている。医療の現場では，患者が医師に症状を説明し，また医師が患者に症状の確認をする。その際，「頭が割れるような痛み」といった「たとえる表現」が用いられ，その表現によって診断が絞られることも多いという。

「ような」という語は，「ようだ」の連体形で，名詞を修飾して語と語を結びつける。次の例文（1）と（2）の違いから明らかなように，「AようなB」を用いると，A，Bの意味関係は，Aに似ているBということで，直接的な結びつきではなくなる。

（1）さんまを焼いているにおい

（2）さんまを焼いているようなにおい

（1）で漂うにおいは，さんまを焼いているそのにおいに違いないが，（2）は，においの元が，本当にさんまを焼いているのかそうでないのかはわからない。

＊専修大学国際コミュニケーション学部特任教授

「ような」が医学書の中でどのような使われ方をしているのかを知るために，まず「ような」のＡとＢの意味関係を見ていきたい。医学書という一つのジャンルに限定してその使用例を観察することで，「ような」の意味と用法を新たな視点で見ていくことができるのではないかと考える。

２．先行研究

「ような」は「ようだ」の活用形なので，「ようだ」の分類の中で論じられることも多い。「ようだ」の分析は，永野（1951），田中（1971），吉田（1971），今西（1985），森山（1995）など数多くある。たとえば，田中（1971：891頁）は，「ようだ」の意味を以下のように分類している。田中のあげている「ような」の例をあげるが，以下の分類の⑤には「ような」の例文はない。

① 類似の事柄をとりあげて，ものごとの性質・状態を述べる。

　にが虫をかみつぶしたような顔

② 手近なわかりやすい例，あるいは，著しい例をひいて述べる。

　富士山のような形の山が羊蹄山です。

③ 内容や程度が，同質あるいは同等であることを表す。

　字も読めないようなやつらだ。

④ 目標・目的あるいは基準などを示す。

　法に触れるようなヘマはしないよ。

⑤ 結果や結論に到達するのに，不自然なところや矛盾がないことを表す。

　この実験でわかるように目に害がある。

⑥ 前後の文脈や，話の内容を引き合いに出すのに用いる。

　以上のような理由で推薦を辞退します。

⑦ 間接的に他人のことばを引用したり，文句や諺をひいたりするのに用いる。

午後から天気がくずれるようなことを言っていた。

この分類の問題点は，実際の用例を前にしたとき，分類の判断に迷うことが多い点である。たとえば，②の「富士山のような形の山が羊蹄山です」と言うとき，この富士山は確かに②のわかりやすい例とも言えるが，①の類似の事柄をとりあげたとも言えるのではないだろうか。あるいは，③の同質性を表すという「字も読めないようなやつらだ」も，②の著しい例を引いて述べているとも取れる。その点，次の森山の分類基準は明快で，ぶれが少ない。

森山（1995：493–494頁）[1)]は，「よう」の多義性を類似性を軸に分析している。森山は，AとBという二つの項の同一関係は，論理的には，同等・包含的か，不一致か，不明かの三つの場合しかなく，「ような」という形式は純粋な同等関係以外のすべてを表し得るとして，「ような」の多義性を以下のように整理する。

① ライオンのような動物がアフリカで取ったビデオに写っていた。
→ ライオンかどうかわからない。：推量的な意味：不明関係
② ライオンのような犬がいた。
→ ライオンではない。：比喩的な意味：不一致関係
③ ライオンのような肉食動物は生肉からビタミン類を摂取する。
→ ライオンもそうである。：例示的な意味：包含関係

森山の①～③は，それぞれ推量，比喩，例示と呼ぶことができる。本稿では，この3分類を用いる。しかし，今回の医学書の用例には，森山の3分類に収まらないものがあったので，指示と目的を加えて5分類とする。4節で詳しく述べる。

ほかに比喩に関する研究として中村の研究（1977）がある。中村（2013：

10頁）は，「お相撲さんみたいな人」という表現について，「実際には違うと思いながらお相撲さんを引き合いに出した場合にのみ，比喩表現と言えるのだ」「何らかの修辞意識が必要なのである」と述べている。中村は文学作品を主な分析対象としており，本稿の医学書はそれとはかなり異なるデータと言える。

「ような」は，統語論的には連体修飾に含まれるものだが，寺村（1992：192–336頁）は，「ような」は取り上げていないものの，連体修飾について細かく分析を行っている。そこでは，修飾される名詞の性質によって修飾部と修飾される名詞の結びつき方の関係性が変わることを指摘している。「ような」においても修飾される名詞の性質は重要で，寺村の分析は参考になる点が多い。

3．データ

本稿では，医学書データとして次の5冊を用いた。

1）『今日の治療指針2018年版』医学書院
2）『今日の診断指針　第7版』医学書院
3）『新臨床内科学　第9版』医学書院
4）『今日の小児治療指針　第16版』医学書院
5）『year note 2020年版』メディックメディア

1）～4）は長年版を重ね，現場の医師に参照されているもので，5）は医師国家試験を受験する医学生にもっとも読まれている参考書である。この5冊の本文テキストを抽出し，句点で終わる行のみを分析対象とした。総語数は4,758,578語（記号・補助記号・空白を除く）である。語数は，形態素解析器としてMeCab（Ver.0.996），解析用辞書としてIPADic

（Ver.2.7.0）を指定し，独自に開発した「医療語彙辞書」（115,897語）を追加して形態素解析した結果による。全文検索システム『ひまわり』ver.1.6.9を用いて，分析対象のテキストにおける文字列で「ような」を検索し，目視で前後の文脈を確認して，該当する用例を抽出した。

4．「ような」の用法の分類

本稿では「ような」の用法を，指示，例示，比喩，推量，目的の五つに分ける。ただし，推量用法は用例にはなかった。推量，例示，比喩は森山の基準に従い，不明関係，不一致関係，包含関係で分ける。さらに，実際の用例には，文中の特定の個所を指示する指示用法と目的を表す目的用法とがあったので，これを加えた。5冊の医学書の「ような」全数は以下の表1に見るように1,692例であった。以下，順に各用法を見ていく。

表1　「ような」の用法

用法	指示	例示	比喩	目的	推量	計
個数	886	657	125	24	0	1,692
割合	52.4	38.8	7.4	1.4	0.0	100

4－1．指示用法

表1からわかるように，「ような」の用法の中でもっとも多いのがこの指示用法である。Aに来るのは「このような」「そのような」「以下のような」といった連体詞が多いが，図表の指示や「上にあげたような」などの述語も含む。文中で文内の他の個所を指し示す用法である。先の田中（1971）の分類では⑥に当たり，「指示」として用法の一つに取り上げている先行研究も多い（たとえば永野（1951），今西（1985））。この用法は，広くは，例示と言えるが，書き言葉に限られた用法で，かつ数が多いことから指示用法として別にした。以下に用例をあげる。

（3）　新しいタイプの食中毒菌が出現することも稀ではない。このような“隠れた病原菌”が予期しない集団発生，大流行を引き起こすことがある。

（4）　測定した血糖値が高値あるいは低値であった場合，なぜそのような値が出たのか考え，記録用紙に理由を記載しておくことを患者に説明し記録してもらう。

（5）　接種対象としての優先順位はまず，高齢者を第１として表10-22のようなハイリスクグループが挙げられる。

４－２．例示用法

「ＡようなＢ」の意味は，以下に示すように，ＡとＢの関係性と，Ｂの名詞の性質によって決まる。

例文	ＡとＢの関係
出血したとき	事実
出血したようなとき	包含関係　⇒　例示
バットでなぐられた痛み	事実
バットでなぐられたような痛み	不一致関係　⇒　比喩
バットでなぐられた傷	事実
バットでなぐられたような傷	不明関係　⇒　推量

例示の場合は，Ａが下位概念，ＢがＡの上位概念で，ＡでＢの具体的な内容を説明する。Ｂには，表２に見るように，「場合」「症例」「症状」などの抽象的な語が多い。

以下，用例をあげる。

（6）　敗血症を伴うような場合は尿管ステントの挿入または腎瘻を造設し，早急に閉塞を解除する。

表２　例示用法のＢの高頻度語

順位	Ｂの語	頻度	割合
1	場合	43	6.5
2	症例	25	3.8
3	症状	19	2.9
4	疾患	17	2.6
5	状態	12	1.8
6	もの	12	1.8
7	病態	10	1.5
8	出血	9	1.4
—	その他	510	77.6
	計	657	100.0

（７）　飲酒後，あるいはその他の原因で嘔吐反射に続き鮮血もしくは黒色の吐物を吐出するような典型例の場合は問診だけでも診断は可能である。

（８）　２型糖尿病と思われても，徐々に血糖コントロールが悪化するような症例では，SPIDDM も考慮し（略）

（９）　日常生活に支障をきたすような症状，行動や意思疎通の困難さが多少みられても（略）

（10）　音量は微弱なものから Levine（レヴァイン）Ⅴ度に達するようなものまである。

Ｂが形状や動きの場合，外観の叙述によって我々はそれがどういう形や動きなのかを知る。この外観の説明は，比喩を用いることもあるが，以下のように例示も用いられる。

〈形状〉

（11）　本体を左腋窩下方（第５～６肋間，中腋窩線上），リードを胸骨左縁に平行になるような形で植え込み，本体と皮下リード間で感知ならびに電気ショック治療を実施する。

(12)　図２に示すようにピークフローが低下して台形のような形状を呈するのが特徴である。

〈動き〉

(13)　チックが起こりそうになったとき，それと拮抗するような動きを行う。」

(14)　上肢を挙上した姿勢での仕事や，重量物を持ち上げるような運動や労働，リュックサックで重いものを担ぐような作業は症状を悪化させるため避けさせる。

また，Ａが「という」「といった」のような引用表現の場合も例示になる。

(15)　（略）対応に苦慮していても「全く異常はありません」のような断定的な表現は避けたほうが無難である。

(16)　目的もなく家を出て徘徊し，家に帰れず迷子になるというような症状をしばしば示す。

(17)　患児１人だけ違ったメニューにするといったようなやり方はモチベーションを低下させるため，家族全員が同じ物を食べるといった協力が不可欠である。

「ような」には，Ａが名詞の場合と用言の場合とがある。Ａが病名等の固有名詞の場合には，次の例に見るように，Ｂがそれらの上位概念となる例示用法が多い。

(18)　頻度は低いが意識障害やけいれんのような脳症状も出現する。

(19)　甲状腺機能亢進症や慢性甲状腺炎（橋本病）のようなびまん性腫瘤では，腫大の程度や性状，内部結節の病変の有無の検出に役立つ。

なお，吉田（1971）は，例示用法について，「特定の人・時・所などを例

にあげることが多い」（330頁）として，「安田のような人間には，有る人生を忘れさせ思索を暫し痺れさせてくれる酒だった」のような例が多くあげられている。こうした個別事態の例示は今回のデータには見られなかった。

4－3．比喩用法

ＡとＢが比喩関係になるのは，Ｂが感情・感覚名詞，動きの場合である。医学書の特徴的な表現と言える。表３に比喩用法のＢの高頻度語を示した。

表３　比喩用法におけるＢの高頻度語

順位	Ｂの語	頻度	割合
1	痛み	22	17.6
2	頭痛	5	4.0
3	所見	5	4.0
4	運動	4	3.2
5	音	4	3.2
6	もの	3	2.4
7	形状	3	2.4
8	激痛	3	2.4
9	不随意運動	3	2.4
—	その他	70	56.0
	計	125	100.0

〈痛み〉

(20)　脳動脈瘤の破裂時，突然バットでなぐられたような強烈な頭痛を訴える。

(21)　痛みの性状は，電気が走るような，刺されるような，焼き付くような痛みで，三叉神経の１枝以上の分布に一致して生ずる。

(22)　“刺すような痛み”“灼けるような痛み”“チクチクごろごろ”などの表現で，発症時期や経過が明らかな場合には角膜疾患を疑う。

(23)　片側の眼窩をえぐられるような激痛が１時間ほど続く。

(24)　頭全体を締め付けられるような持続的な頭痛で（略）

(25)　大動脈解離症例の85%は急性の疼痛で発症するとされ，突然の鋭く，重度の痛みを呈することが多く，裂けるような痛みと患者は表現することも多い。

(26)　（略）四肢の遠位部に左右対称性の手袋・靴下型のしびれ感，灼熱感，砂や小石の上を素足で歩くときのような痛みや，さらには刺すような痛みといった感覚障害，筋力低下，筋萎縮がみられる。

自分の痛みを人に伝えるには，その感情を言葉で表現する必要があり，比喩が用いられる。こうした比喩は，日本語の痛み表現として定型化している。これに類するものとして，次の被修飾部Bが「音」「声」「感じ」などの感覚名詞がある。

〈音・声・感じ〉

(27)　前収縮期，収縮期，拡張早期にまたがる引っかくような音で，蒸気機関車のようであることから locomotive murmur とよばれる。

(28)　真鍮音あるいは吠えるような音を伴うせき，嗄声，喘鳴（吸気時により出現しやすい）を認める。

(29)　音声チックには，咳払いをする，鼻をすする，鼻を鳴らす，吠えるような声を出す，

(30)　または，「ギュッギュッ」という，まるで雪を握ったような感じを受ける。

専門の医学書でありながら，こうした比喩表現の語彙は日常遣いのわかりやすい和語が使われている。ただし，日本語話者にはわかりやすいが，たとえば，雪に触れたことのない非母語話者には，(30) は説明が必要である。

以下の被修飾部が「形状」「動き」類の場合は，「痛み」とは異なり，比喩用法だけでなく，例示用法もある。先に例示用法で「台形のような形状」

の例をあげたが，対象がこうした既存の言葉で説明できないような形状をしているとき，比喩が用いられる。また，(32)（37）に見られるように原語で比喩が用いられているとき，比喩の訳語が用いられる。

〈形状〉

(31)　全体として皮膚にめり込むような形状

(32)　（略）ちょうど鉛筆の尖った先に，キャップをつけたような pencil-in-cap 変形

(33)　（略）くり抜いたような小円形潰瘍

(34)　ミエログラフィでの脊髄表面にみられる虫がはうような陰影を確認することは以前はよくされたが，必ずしも的確な情報とはならない。

〈動き〉

(35)　ひねるような，または雑巾をしぼるような奇妙な運動。舞踏運動よりゆっくりとしている。脳性麻痺などの周産期障害でみられることが多い。

(36)　あたかも踊っているような，不規則で目的のない非対称性の運動。

(37)　丸薬をこねるような動き（pill－rolling）にみえることが多い。

(38)　主として四肢の遠位筋に出現する非律動的で，ゆっくりとしたねじるような不随意運動である。

(36）の「踊っているような運動」は，客観的にも踊っているような様子であろうから例示ともとれる。しかし，本人が踊る意思を持って踊っているわけはないという点で比喩とした。

このほかに比喩用法となる場合として，以下の場合があげられる。

① 「あたかも」「まるで」といった副詞が共起して反事実であることが明らかな場合。吉田（1971：327頁），益岡・田窪（1992：133頁）など，すでに多くの指摘がある。

(39)　すなわち，脳低動脈血流があたかも盗まれたような病態が起きる．これをsubclavian steal 症候群と呼ぶ。

(40)　（略）健常肺が漸次縮小しあたかも肺が消えて行くような所見が見られる。

(41)　まるで夢遊病者のような奇異な症状を呈するときもある。

② 「かのような」という表現が用いられた場合。事実でないという点で，比喩用法と言える。

(42)　（略）一見するとあたかも死亡しているかのような状態となる。

(43)　規制逃れのために規制薬物（違法薬物）の分子構造の一部を組み替えただけの類似薬物が，あたかも安全かのような「合法ハーブ」や「脱法ドラッグ」などと称して未成年を含む若者に急速に蔓延している。

Aが名詞の場合，病名のような固有名詞では例示用法が多いが，Aが一般名詞の場合は，比喩用法も多い。

(44)　生検では，胞体が広く目玉焼きのような形をしたHCL細胞がびまん性に浸潤している。

(45)　腹水があるとわかりやすく，よじれた紐のような構造としてみられる。

(46)　可能な限り単剤での治療を選択し，絨毯爆撃のような治療は選択しない。

(47)　片側性の強い痛みが，１～２か月の間にまとまって頻発し，群発地震のような起こり方であることから群発頭痛といわれる。

(44) は細胞の形を説明しているわけだが，その形は単純な円形ではないと想像される。「目玉焼き」という比喩を用いることで，その形状が知らない人にも伝わる。

4－4．目的用法

「できるような」「ないような」もしくは「ようとするような」の形で，「ような」が目的を表す場合がある。この用法は，類似性とは関係しないため，森山の分類には含まれていない。前田（2006）は，「ように」を分析したものだが，「子供たちが落ちないように柵を作った」（3頁）という文の「ように」を「「様態」の一種としての「時間的に後から起こる事態としての目的」「結果としての目的」を表す」（46頁）として＜結果・目的＞と呼んでいる。結果目的の用法の多くは，「ように」に見られ，複文を形作ることが多いが，「子供たちが落ちないような柵を作った」も同類と言えよう。

(48)　正常であれば安心を与え，異常を疑う場合には不安を軽減し，適切な対応ができるような助言をする。

(49)　栄養管理の目標は胎児に類似した成長と体組成を維持できるような栄養を与えること。

(50)　（略）術中および術後に喘息の発作に対応できるような準備が必要である。

(51)　（略）密に連絡をとって，支援を受け，アウトブレイクを生じさせないような感染防止対策を講じていく必要がある。

厳密に言えば，上の各例文は，「ように」節の場合と，「ような」による連体修飾節の場合とでBの名詞の意味が異なる。「適切な対応ができるように，助言をする」では「助言」が限定を受けず，一般的な助言を指すが，(48) の「適切な対応ができるような助言をする」では「助言」が限定されている。その点で，広くは例示用法に含まれるものとも言える。

4－5．推量用法

森山は（1995）は，「ような」の用法の一つに推量（AとBが不明の関

係にある）をあげている。森山（1995：500頁）があげる用例は，「整形手術したような跡」「知り合いのような様子」で，さらに，不明関係が成り立つ条件として，森山は被修飾名詞Ｂが「根拠の事物」であること，そして，特定の時空で観察されたという文脈が必要であることをあげている。

例文	ＡとＢの関係
バットでなぐられた傷	事実
バットでなぐられたような傷	不明関係　⇒　推量

また，姫野（2002）は，「現金自動預け払い機がバールのようなものでこじ開けられているのがみつかりました」という例文について，この「もの」はバールであってもよい点で比喩ではなく，また，例示のＡは一般的に集合を指すのに，このＡの「バール」は特定の個を指していると考えられるため例示でもなく，推測と考える。森山の分類でいえば，不一致でも包含でもなく不明だから推量ということになる。

今回のデータには，「バットでなぐられたような傷」といったこの推量に当たる用例が見当たらなかった。姫野のあげた「Ａのようなもの」は，今回のデータでは，「ごみのようなものが見える」といった比喩の用法であった。今回のデータは，ある特定の１事象，森山の用語で言えば特定の時空で観察されたという文脈，あるいは，姫野のいう個について推量して述べるということはなく，観察された事実の積み上げに基づいて明らかな知見を述べるという書かれ方をしている。そのために推量用法がないという結果になったと考えられる。永野（1969），吉田（1971）[2)]は，森山より推量の範囲を広く取り，不確かな断定を推量用法に含める。そのため，そこには「ような気がする」という表現も含まれているが，こうした個人の見解を述べる表現も今回のデータには見られない。

5．分類の補足

ここまで医学書における「ような」表現とその分類を見てきた。本稿では「ような」を指示，例示，比喩，推量，目的の五つの用法に分けて検討したが，本節では，この分類の問題点にふれておく。

5－1．婉曲用法

先に例示用法であげた例文を再掲する。

（4）　測定した血糖値が高値あるいは低値であった場合，なぜそのような値が出たのか考え，記録用紙に理由を記載しておくことを患者に説明し記録してもらう。

用例（4）では，必ずしも「ような」を使う必要はない。場合が文脈中に限定されているのだから，「その値」とすることも可能である。しかし，厳密に表現したい場合を除き，通常は，「そのような値」を使うであろう。慣習による修辞的な用法と言える。

「ような」は，基本的には同一でないことを述べる表現であるため，婉曲の意味が生じやすい。永野（1951：275–278頁）は「ようだ」の用法として四つをたてているが，その一つは，婉曲用法である。この婉曲用法は，指示の場合に限らない。次の例示の用例を見てみよう。

(52)　すなわち，握る拳や手のひらで胸をさする動作，あるいは左肩を押さえるような動作

用例（52）のはじめの「胸をさする」動作には「ような」がなく，次の「左

肩を押さえる」動作には「ような」が付加されている。同じ「動作」という名詞に対して「ような」を使う場合と使わない場合があり，「ような」を使う必然性の低いことがわかる。つまり人は必要がないところにも「ような」を婉曲的に使っている。この婉曲用法は，ＡとＢを直接的に結び付けない「ような・ようだ」が持つ必然的な性質と言える。婉曲の有無の判断は，主観にもよるので，用法の一つとしてはじめからたててしまうと，他の用法との線引きが難しくなると考え，本稿では，婉曲を「ような」の１分類とはしなかった。現代語で「とか」「なんか」など，近年ぼやかし表現が多く使われることが指摘されるが，この「ような」も断定を避け，確実ではないという含みを持たせて主張を和らげている。責任を問われないように逃げを用意した表現とも言える。

５－２．同等関係の有無

５－１．で「そのような」が「その」と等しい場合があるということを述べた。すなわち，「ような」にはそもそも同等関係が含まれるのではないかと考えられる。「胸やけのような症状」という表現はどうだろうか。我々の生活では通常，「胸やけのような症状」と言った場合，胸やけとは違うかもしれないが，胸やけに似ている，そして，時にそれが胸やけであってもいいのではないだろうか。「台形のような形状」という表現は，台形であることを必ずしも排除しないと思われる。森山（1995）は「よう」という形式が「純粋な同等関係以外のすべてを表し得る」（494頁）としている。論理関係の上では確かに類似は同等を含まない。しかし，語用論的には論理関係と100％対応はせず，「ような」が時に同等関係も含むことを排除しないように思われる。

ただし，医学はこのことばの使い方に厳密で，疾患・診断名がＡに来た時には同等関係を認めない。このことは，「ような」ではなく，同語源の「様（ヨウ）」を使う一語化した表現の場合に明らかである。以下は，『医

学大辞典』の「インフルエンザ様疾患」（193頁）を見出し語とする記述である。下線は筆者による。

> インフルエンザはかぜ症候群の代表的疾患で，インフルエンザウイルスの上気道感染により，急激な発熱，咳，咽頭痛などの上気道症状を特徴とする。しかし，このような症状はほかのウイルスによるかぜ症候群あるいは別疾患の初期症状として現れてくることもあり，インフルエンザとの鑑別が困難な場合がある。流行状況や発熱を伴う特徴的かつ急激な症状からインフルエンザが疑われるものを，一括してインフルエンザ様疾患と称している。

ここでは，インフルエンザが疑われるものを「様」を使うことで，インフルエンザとの切り分けを行っている。すなわち，医学書では疾患名がAに来るときは，「ような」「様」によって意味が明確に使い分けられていると言える。それ以外の場合は，時に同等関係も含まれると考えられる。

6．まとめ

医学書の「ような」表現を分析した結果，以下の点が観察できた。

① 指示用法と例示用法が多い。

② 比喩用法は，人の感情・感覚を伝えるために用いられる。被修飾部が「痛み」の場合に際立って多い。

③ 医学の専門書ではあるが，比喩の修飾表現の語彙は日常遣いの平易なものが使われている。

④ 個別の事態，ことがらについて述べていないため推量用法がない。

⑤ 「ような」は時に同等関係を含むと考えられるが，修飾部が疾患名の時は同等関係を排除する。

医学におけるたとえる表現は，医師と患者，また医師同士が誤解なく互いに情報を共有しあうために使われる。中村（2013）は，文学作品の比喩表現について「それはその作者のその時どきにおける心象風景の点描であり，比喩表現の例全体として見れば，意識下の世界観を映し出すとも言って言えないことはない。」（９頁）と述べているが，こうした心象風景を表す文学作品とは大きく異なる使い方をしていることがわかる。

本稿では，医学書における「ような」の使われ方を見たが，他分野との比較は今後の課題である。また，医学書の中においても，「ような」以外にもさまざまなたとえる表現が使われており，今後そうした表現との比較を行っていきたい。

付記：本研究は日本学術振興会の科学研究費補助金（(B) 18H00679）の助成を受けたものです。

注

１）森山（1995）は「よう」とともに「みたい」を取り上げているが，今回の医学書のデータには「みたいな」は１例もなかったので，本稿では扱わない。

２）吉田（1971：325頁）は志賀直哉の『暗夜行路』における「ようだ」の使用数を調べている。それによると比喩181例（例示を含むが，比喩の用法の約４分の１弱とある），推量86例とあるので，全体として比喩＞推量＞例示という数量関係になる。医学書のデータとは大きく異なっている。

参考文献

今西浩子1985『助辞編（三）　助詞・助動詞辞典』研究資料日本文法７巻　明治書院
寺村秀夫1992『寺村秀夫論文集Ⅰ』くろしお出版
田中章夫1971「ようだ」松村明編『日本文法大辞典』明治書院
永野賢1951『現代語の助詞・助動詞―用法と実例―』国立国語研究所報告３　秀英出版
永野賢1969「二　ようだ―比況〈現代語〉」松村明編『古典語現代語　助詞助動詞詳説』学燈社
中村明2013『比喩表現の世界　日本語のイメージを読む』筑摩書房
中村明1977『比較表現の理論と分類』国立国語研究所報告57　秀英出版
姫野伴子2002「〈論考〉Ｎ１のようなＮ２」『留学生教育』４　埼玉大学留学生センター

前田直子2006『「ように」の意味・用法』笠間書院
益岡隆志・田窪行則1992『基礎日本語文法―改訂版―』くろしお出版
森山卓郎1995「推量・比喩比況・例示―『よう／みたい』の多義性をめぐって―」『宮地裕・敦子古稀記念論集　日本語の研究』明治書院
安田芳子1997「連体修飾形式「ような」における〈例示〉の意味の現れ」『日本語教育』92
吉田金彦1971『現代語助動詞の史的研究』明治書院

調査資料

岡庭豊・荒瀬康司・三角和雄2019『イヤーノート2020　内科・外科編』メディック・メディア
医学書院編2018『今日の治療指針　2018年』医学書院
金澤一郎，永井良三　総編集2015『今日の診断指針　第7版』医学書院
水口雅・市橋光・崎山弘2015『今日の小児治療指針　第16版』医学書院
高久史麿・尾形悦郎・黒川清・矢崎義雄監修2010『新臨床内科学　第9版』医学書院
伊藤正男・井村裕夫・高久史麿総編集2010『医学書院医学大辞典　第2版』